

中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの構築に関する研究  
— 広東外語外貿大学を例として —

劉 勁聰<sup>\*1</sup>、陳 多友<sup>\*2</sup>、丁 国旗<sup>\*3</sup>

Study on Construction of China-Japan-Korea “Campus Asia” Bachelor  
and Master Joint Development Model

LIU Jincong<sup>\*1</sup>, CHEN Duoyou<sup>\*2</sup>, DING Guoqi<sup>\*3</sup>

---

\*1 元神戸女学院大学 文学部 総合文化学科 客員研究員、

広東外語外貿大学 東方言語文化学院 日本語学部 准教授

\*2 広東外語外貿大学 東方言語文化学院 院長、日本語学部 教授

\*3 広東外語外貿大学 東方言語文化学院 日本語学部 教授

連絡先：劉勁聰 〒510420 中国広東省広州市 白雲大道北2号 広東外語外貿大学東方言語文化学院  
liujincong@hotmail.com

## 要 旨

本研究は広東外語外貿大学キャンパスアジア・プログラムの学部教育モデルを基に、人材養成の範囲を拡大し、深める可能性を探求するものである。即ち、キャンパスアジア・プログラムの学部教育を大学院教育まで延長することで、中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの構築に関する理念とそのあり方を検討し、東アジア各国間大学教育共同運営モデルの革新への一助とする。

**キーワード：**中日韓、キャンパスアジア・プログラム、学士・修士共同養成、構築、モデル

## Summary

This study intends to search for a possibility of expanding and deepening the scope of human resource development based on the faculty education model of Campus Asia Program constructed by Guangdong University of Foreign Studies. That is to say, the expansion of the faculty education of Campus Asia Program to the graduate school education promotes to examine the principle and the role concerning the construction of the China-Japan-Korea “Campus Asia” Bachelor and Master Joint Development Model in order to support the innovation of the model of the university education joint operation between East Asian countries.

**Keywords:** China-Japan-Korea, Campus Asia Program, bachelor and master joint development, construction, model

## はじめに

中国共産党第十八期全国代表大会、特に第十八期中央委員会第三次全体会議以来、習近平国家主席は教育に関して重要な論表を行い、新たな時代の中国教育革新・発展の重大な理論と実践問題を詳しく説明した。これは中国の特色ある社会主義教育理論を豊かにし、中国が今後教育事業の革新・発展をするために強力な思想的武器となる。習近平国家主席は、中国は世界中の各国との交流を強め、教育の対外開放を広げ、中国の教育事業の発展を積極的に支援し、世界各国の国民とともに人類の更なる未来へ歩いていくことを推進すると語った。また、これらの重要な談話は教育のグローバル化が中国教育事業の革新・発展を推進し、人類文明の進歩を促進するために重要な意義があると説明した。新たな環境の下で、大学は速やかに教育理念を転換し、グローバル化人材養成モデルを構築するべきである。たとえば、海外の優秀な大学との共同革新を進め、国内外学生の学士・修士共同養成モデルからはじめ、教育改革を展開することなどが考えられる。本論文は広東外語外貿大学を例とし、まずはキャンパスアジア・プログラムの学士教育共同養成モデルの背景と内容を紹介し、関連事業の成果をまとめる。次に、中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの考えを提起する。最後に、中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの改革の方法と実施のあり方について検討する。

## 一 中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの基盤

### 1 キャンパスアジア・プログラムとは

キャンパスアジア (CAMPUS Asia) ・プログラムは正式名称を「アジア大学生集団移動交流プログラム」(Collective Action of Mobility Program of University Students) と言い、中日韓三カ国の政府が主導し、三カ国の大学が参加し、三カ国の大学間の移動を促進するプログラムである。このプログラムは中日韓三カ国の政府主導の教育交流プログラムであり、三カ国が相互理解を深め、未来に向けた全面的な協力の中で大学教育の協力を推進する具体的な事例である。

中日韓三カ国大学の交流・協力を推進するため、三カ国はキャンパスアジア・プログラムを共同実施することを決めた。これは単位互換、学生交流などの様々な形の交流プログラムを通し、大学の競争力を強め、アジアの次世代の人材を養成するものである。中日韓三カ国政府の教育部門、大学、評価機関、実業界などの代表が運営する中日韓大学交流協力促進委員会は四回の会議を開き、キャンパスアジア・プログラムを実施する方針、試験的プログラムなどについて合意した。

2011年11月、中国教育部は中日韓三カ国キャンパスアジア・プログラムの試験的なプログラムの審査結果を発表し、51の有効な申請から10プログラムを試験的なプログラムとして決定することによって、キャンパスアジア・プログラムが具体的な実施段階に入ったことを示した。上記の三カ国は毎年100名ずつの学生を派遣し、受け入れることを目指している。三カ国政府

の教育管理最高部門の専門家による審査の結果、最終的に試験的プログラム資格を得たのは、日本では東京大学、立命館大学をはじめとする10カ所の有名大学、韓国はソウル国立大学校、高麗大学校をはじめとする7ヶ所の有名大学、中国は北京大学、清華大学、広東外語外貿大学をはじめとする8ヶ所の有名大学であった。

## 2 広東外語外貿大学のキャンパスアジア・プログラム

### (1) 中日韓連携講座

広東外語外貿大学東方言語学院と立命館大学文学部、東西大学校日本文化研究センターは従来よりグローバル人材養成協力パートナーであり、現在は強力なチームを結成し、大学間共同運営モデルとグローバル化管理体制を確立している。2005年11月、三大学は中日韓で三カ国の教師・学生・研究員が共に参加できる連携講座を実施する可能性について検討した。一年余りの検討、論証と現地での技術的テストを通して、三大学は人員、技術、カリキュラムと運営モデル、管理体制などの面で一致し、2006年11月に中日韓連携講座が始まった。

連携講座は学生の思考能力、問題解決能力を向上させる場である。学生は三カ国の教師チームの引率の下で、中日韓三カ国間に存在する共通の問題、注目されている問題などをめぐり、東アジアと世界の視点から国別に問題意識を持った文献調査、現地調査を行い、問題提起及び問題解決策を形成した後に連携講座で発表し、討論を行う。現代社会の文化現象から国際経済政治まで、学生が触れる知識や学術的領域は極めて広い。

中日韓三カ国は同様の漢字文化圏に属しているが、近代に入る歴史的過程が違い、社会文化も異なる。それゆえ、三カ国の大学生は連携講座を通じ交流し合うことで、東アジア文化の差異を正しく感じ取り、相互理解を深め、互いに信頼関係を構築する。連携講座はカリキュラムと運営の面でも従来のモデルと異なる。まず、学期中は二週に一回連携講座を行い、毎回一カ国の大学の学生が事前に確定したテーマについて発表し、他の二カ国の学生は問題提起とコメントをし、最後に指導教師がまとめる。次に、連携講座では毎年の夏休みと冬休みに一週間の集中講義があり、場所は三カ国が順番に担当している。集中講義の間は学生が一堂に集まり、中日韓の文化、経済、社会などの面で注目されている問題、共通課題について調査研究し、討論を行う。この他、集中講義の間に学生は現地の博物館や歴史遺跡を見学し、フィールドリサーチを行い、文化上の理解を深める。

2005年以来、中日韓三カ国で1000名に近い学生が連携講座に参加してきたが、講座に参加した卒業生は各国の各種領域で活躍している。中日韓連携講座の実施は三大学の在学留学生率とグローバル化水準を高めたほか、立命館大学、東西大学校、広東外語外貿大学の間で行われている共同修士学位プログラム（DMDP）を通じて、三つの大学で「キャンパスアジア」を構築する基盤となった。

### (2) 広東外語外貿大学キャンパスアジア・プログラムの内容

2011年11月、広東外語外貿大学と立命館大学、東西大学校で共同申請した「東アジア次世代人文学リーダー養成のための、中日韓共同運営トライアングルキャンパス」をテーマとしたキャンパスアジア・プログラムが国家レベルの試験的なプログラムに指定され、現在広東外語

外貿大学及び広東地域の教育グローバル化と社会科学振興計画、高効率教育、自主的改革における典型的な成果の一つになっている。このプログラムは学部教育グローバル・プログラムであり、2012年に始動した。今の段階では、この種のプログラムに関する中日韓の公的機構と民間機関の評価でトップになっている。中国教育部はこのプログラムを国際間大学教育共同運営の模範としている。

このプログラムは2005年以来形成された三つの大学の繋がりを基盤に、中日韓三カ国のキャンパスアジアを構築し、短期研修、海外インターンシップ、遠隔講義を共同で推進するなど、内容の充実した4年制大学プログラムである。2014年の7月初めに大阪で、三大学はプログラムを常設化し、体制を更に強化していくことに合意した。朝日新聞はこれに注目して報道し、三カ国の大学教育に多大な影響を与えた。前述した通り、このプログラムは中日韓三カ国の言語運用力と人文的素質を持ち、人文学の面から東アジアの諸問題を洞察し、優れた実践能力のある東アジア・エリート人材を養成することを目指している。試験的なプログラムの段階では、三つの大学でそれぞれ10名の学生を選び、総計30名の学部生を選んだ。常設化後は、毎年各大学18-20名、総計60名を選ぶ予定である。遠隔講義、移動キャンパス、集中講義、現地調査、学術交流などの方式で人材養成を推進する。履修科目の面では、三大学は人材養成目標に相応しいカリキュラムを形成し、単位を互換し、学生はキャンパス間の移動を通し、三つの大学が共同運営する科目及び各大学の専門科目を履修することができる。これらの科目を通じ、中日韓三カ国の言語、文化、文学、歴史などの面への理解を深め、文化、教育研究領域で活躍できる優秀な人材を養成する。プログラム参加の学生には課程修了後、三カ国の共同学位と各大学の学位を授与する。このプログラムは人材バンクの機能を発揮でき、プログラムの実施は中日韓三カ国の大学教育のグローバル化に新たな運営方式を提供し、中日韓三カ国において優秀な人文学の人材を養成する。

広東外語外貿大学キャンパスアジア・プログラムの人材養成目標は以下の四点である。①東アジアの伝統文化知識を有し、変化しつつある東アジアの情勢と現状に高度な理解力と把握力を持つ人材を養成する。②高度な文献分析能力を持ち、現代の中日韓の文化（文学、映画、ドラマ、アニメ、漫画、言語など）の学習を通し、各国の社会、生活、歴史、メディアの状況への深い理解に到達する。③中日韓三種類の言語習得と海外インターンシップ、実践を通し、コミュニケーション能力の高い、国際的環境で活躍できる人材を養成する。④東アジアが直面している各種の問題を平和的に解決できる人材を養成する。

広東外語外貿大学キャンパスアジア・プログラムの主な特徴は移動キャンパスである。学生は四年間の学習時間で、一年目と四年目は自国で学習し、二年目と三年目は移動学習という方式を取る。移動学習の二年間は、学年を三学期に分ける。一学期は中国（広東外語外貿大学）で学び、二学期は日本（立命館大学）で学び、三学期は韓国（東西大学校）で学び、それぞれ相応の言語科目と専門科目を学ぶ。さらに、三大学の学生と一緒に移動キャンパスの方式で学ぶ。各大学は各国の歴史、文化、社会などに関する専門科目を開設し、言語能力に応じて現地の言語で授業する。理想的な授業効果を得るため、全ての専門科目は担当教員がその領域で最先端且つ最新の教科書を選ぶ。各国の学生は移動キャンパスの二年間、寮で共同生活を行い、

一緒に授業を受けるが、他国の学生との緊密な共同生活を通じ、討論、共同研究などの相互交流を行い、文化摩擦の中で、適当な交流方法を探し、異文化コミュニケーション能力を向上させる。この他、移動学習終了後、持続的にインターネットや遠隔システムなどを使い、各国の学生間の交流と共同学習を行う。学生卒業後、卒業生プロフィールネットワークを構築することで、学生の事業発展を追跡する。この方法で教育された学生は中日韓の多言語能力とコミュニケーション能力をもち、相互の文化、文学、歴史を深く理解している。同時に、彼らは現存する各種の問題を文学の面から観察・分析することができ、具体的な解決策を提起し、中日韓の関連企業、公共機関、教育研究機構、NPOなどで大きな役割を果たすことができ、グローバル化に適応した新たな人材となる。

## 二 中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの構想

キャンパスアジア・プログラムはヨーロッパのエラスムス計画と似た東アジア留学生交換計画である。ヨーロッパでは1981年-1986年の試験的な大学間学生交流経験を基とし、EU委員会が1987年にエラスムス計画を開始し、ヨーロッパの33カ国の4000カ所の大学が参与し、実施以来220万人を超える学生と25万人の教員が利用した。エラスムス計画は大学間の学生の移動と教員の交流を促進し、ヨーロッパ各国の協力と相互理解、社会の持続的平和発展を推進している。このプログラムは地域一体化を進める中で教育的な協力と交流の模範となっており、キャンパスアジア・プログラムの実施において参考となる経験となった。

2004年にEUは初めてヨーロッパと世界各国の学生が交流するプログラムである「エラスムス・ムンドゥス・プログラム」を発足した。エラスムス・ムンドゥス・プログラムに参加し国際的に移動する学生や学者は大学院生が主となっている。筆者は広東外語外貿大学のキャンパスアジア・プログラムも学部教育段階から大学院教育段階に拡張し、学士・修士共同養成を行うべきだと考える。例えば、大学院生を学部教育アシスタントにし、科目通訳などの仕事をさせ、キャンパスアジア・プログラムの学部生への補助教育と国際化の日常管理をすることが挙げられる。同時に、立命館大学と東西大学校との大学院生交換プログラムを積極的に展開し、大学院生を日韓の大学に派遣し、関連専門科目を履修させ、学術の視野を広げ、相手国の学位を取る。それによって、中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルは学部生養成効果を強化すると同時に大学院生養成における多国間協力を実現できるのである。その目標には以下の5つの面がある。(図1の通り)

### (1) 人文エリート

本養成モデルの中心は人文学領域（文化、文学、歴史など）における東アジア交流であり、東アジア地域の人文学に深い理解と研究能力のある国際化人文エリートを養成することである。

### (2) 中日韓三カ国言語への精通

キャンパスアジア大学院生プログラムの学生は以下の二通りから選抜する。①キャンパスアジア学部プログラムに参加した学生の中から推薦された大学院生。②日本語文学や韓国語文学専攻の新入大学院生（言語強化訓練：日本語学生に韓国語を、韓国語

学生に日本語を)。三年間の三カ国大学での共同養成を通して、中日韓同時通訳レベルに到達させる。

(3) 学士・修士共同養成

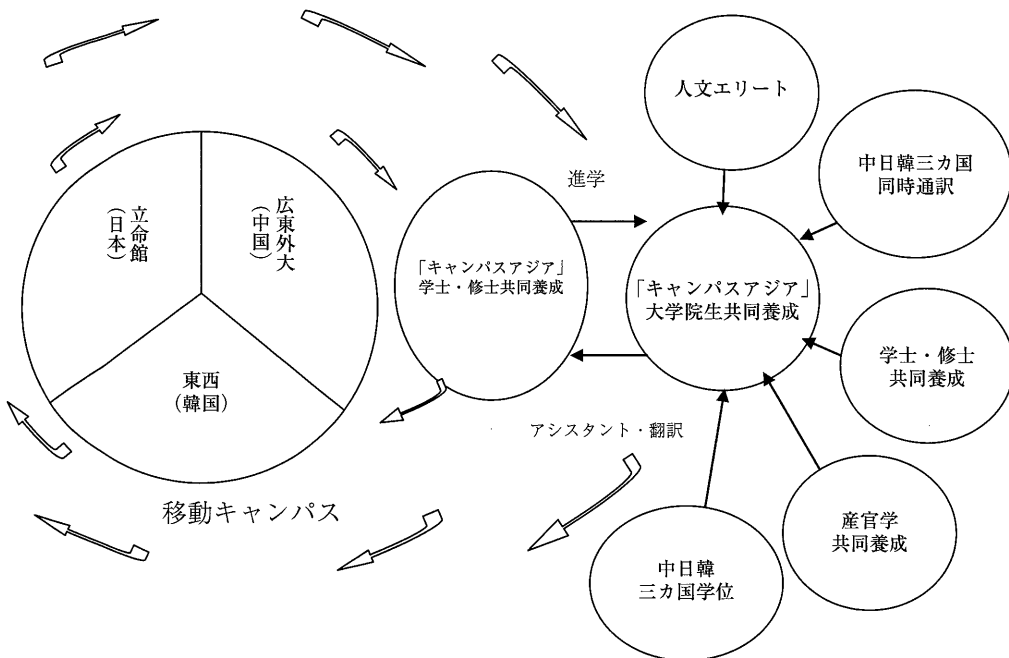
キャンパスアジアの学部生が三カ国大学を移動するとき、大学院生はアシスタントとして教員に協力し、学部生を指導し、キャンパスアジア学部プログラム科目の中日韓通訳をすることで、教育実習経験を重ね、東アジア地域協力の重要性への認識を深める。

(4) 産官学共同養成

中日韓地方政府、非政府機構、企業、研究機構などの社会からの協力を得て共同養成する。社会エリートを招聘し講義を行い、現地の企業などでの実習や調査研究ができるよう学生に機会を与え、学生の社会実践能力を向上させる。

(5) 中日韓三カ国学位

多年間運営してきた広東外語外貿大学、立命館大学、東西大学校間の共同修士学位プログラム（DMDP）を基にして、中国の大学院生を三年間の学習期間に前述の両大学に派遣し、最終的に三カ国の学位を取得させる。同時に、協定に従い、中国側も日韓からの大学院生を受け入れる。単位互換の方式で行うが、論文審査を通過し、卒業要件を満たした者に広東外語外貿大学の学位を授与する。



筆者制作. 2014年6月

図1 中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデル革新プログラム運営図

広東は中国改革開放の先端にあり、香港・マカオに隣接し、珠江デルタの中心にあり、グローバル化が進み、地域的優勢がある。京都は日本文化の発祥地であり、釜山は東アジアのハブ港の一つである。これら三つの先端都市の大学を連携し、プログラムを構築することで、中日韓三カ国の伝統文化及び最新文化に深い理解があり、高度な異文化コミュニケーション能力のあるグローバル化人材を養成するという目標を実現できる。

### 三 中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの構築とそのあり方

#### 1 リードチームを設立する

大学のリーダーが「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデル構築を重視することが鍵となる。大学のリーダーが自ら参加し、「キャンパスアジア」学士・修士共同養成指導委員会を設立し、下に事務室を設け、各学院・各部門を協調させて、協力事業を展開する。指導委員会には政府と業界企業の関連人物を招き、人材養成、科学研究、人事、経費などの問題について確実に協調していく必要がある。指導委員会は定期検査と監督を行い、実施効果の優れた部門や個人を表彰することで、模範となる理念を宣伝すると同時に他の人々や部門を率いる機能を十分に発揮し、教員に「キャンパスアジア」学士・修士共同養成事業を行うことを奨励する。現在、広東外語外貿大学はキャンパスアジア・プログラムを実施するため、学長と副学長を始めとする「キャンパスアジア」リードチームを結成している。メンバーには国際交流センター、教育技術センター、教務事務局、大学院事務局、留学生学院、中文学院、東方語言学院などの部門のリーダーがおり、事務室の人員は主に日本語科と朝鮮語科のリーダーが兼任している。現在既に組織は整備されている。

#### 2 関連制度を整備する

近年来、中国の大学大学院生教育国際化プロセスは加速しているが、資金投入不足・学歴学位認定問題などのボトルネックにより制限され、中国の大学のカリキュラムと品質評価システムは海外と連携し難く、明確に整った法律的な保証が不十分である。これらの制限の問題は速やかに解決されるべきであり、これらの共通問題には更なる注意が必要である。

各方面の利益を守る体制、大学規定、選抜制度、奨励制度、リスク管理制度、人事交流保障関連制度などを整備し、安定した管理制度を形成すれば、中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成の後々の制度上のトラブルを避けることができる。

#### 3 観測、評価、フィードバック体制を建設する

本養成モデルの運営方法として、三大学が毎年教員連携会議を開く。各大学は定期または不定期に教員専門会議を開き、プログラムの実施について検討する。三つの大学が教員会議を開き、プログラムを評価するためには、学外関連専門家から結成された「評価委員会」を設立する必要がある。プログラムの実施効果と達成効果について評価し、本プログラムの改善を目指す。評価内容は年度報告書の形で各方面に通知する。その他、各大学は教育研究、組織運営、設備状況などについて随時検査・評価を行い、改善を求める。同時に、教学研究レベルを向上



するため、定期または不定期に自己評価を行う。これらの目的は自己評価、外部評価という二重管理のもとで内部品質保障体制の確立に伴い、プログラムを制御管理することにある。

#### 4 運営体制への完備・保障

各国は相手国で学位を取得した、または教育経験のある教員を配置し、プログラムの推進を図っている。日常の留学生活の中で学生を支援するため、「キャンパスアジア」事務室には専門のスタッフが配置されている。この他、留学生教育教員も学生を支援している。三大学の協定により、留学生のための相談窓口を設置する。三カ国の学生は留学中相談し指導を受けることができ、適宜 HP やメールといった方法で情報の提供を受ける。この他、留学する前に健康、リスク管理、キャリア教育などの面における情報を十分に与える。各大学が協力し、共同運営機構を設立し、一元化した管理体制をとり、学生が安心して留学できるようサポートする。

#### 5 共同大学院生科目を開設する

調べたところ、現在中国と海外で行われている大学院生留学交換プログラムの授業科目開設は学生自身が各自で決めているため、協調性や統合性がなく、養成効果が想定より小さい。中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルは授業科目開設時の規範化と系統化を図り、協力各方の資源統合を実現し、一体化プロセスを推進し、高度の協調性に到達することを目指している。現在、広東外語外貿大学と立命館大学、東西大学校は共同養成について検討し、カリキュラムを共同で制定している。簡単に述べると、大学院生は三大学を移動して学習し、授業科目のグローバル化と学生の移動性を強化することで各国の多様な文化を感じ取り、視野を広げる。単位互換の面では、学生の意思を尊重し、学生にできる限りの余裕を与え、学生の自主性や創造性を伸ばすべきだと筆者は考える。制度の設計にはより柔軟性が必要であり、運営にもかなりのゆとりを与えるべきである。例えば、異なる学期制度を持つ大学との単位互換、授業時間数の異なる共通科目の単位互換、従来と異なる学習方式で獲得した経験についての単位認可などがある。大学院生が卒業後獲得する学位には、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー、共同学位がある。

#### 6 指導教師助手制度の実施を通じた学士・修士共同養成

現在、中国の大学において、特に文系及び外国語大学の学部教育段階では、指導教師制度が普及していない。これは教員が教育、研究、大学院生養成などの様々な面の仕事をする上、学生数に比べ教員数が少ないため実施が難しい。例え指導教師がいても学部生の学習中の指導教師との連絡もまれであり、相談の時も教師が話すばかりで、十分なコミュニケーションに達していない。海外の教育現状をみると、一般的には雁隊列のような養成方式をとっている。即ち「指導教師」は重点的に大学院生を指導し、大学院生が指導教師助手として学部生を指導する。これにより、大学院生教育を充実させて学部教育に影響を与えると同時に、両者の繋がりを緊密にできる。大学院生と学部生が指導教師助手制度で繋がりを持てば、両者は年齢が近く、共通の話題もあり、生活・学習の場所が学校内にあるため、よりよくコミュニケーションができ

る。中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデルの教員は三カ国の大学の大学院生指導教師であり、彼らは雁隊列の先頭に立ち、大学院生を率いて、学部生を指導するのである。

## 終わりに

広東外語外貿大学は外国語大学であり、グローバル化教育を高水準に推進している。中日韓「キャンパスアジア」学士・修士共同養成の実施は更に大学の国際化と競争力を強めるであろう。我々は三カ国連携講座教育の10年来の経験を十分に発揮し、三大学間の協力レベルを向上させ、今までの交換留学または双学士学位（DUDP）、双修士学位（DMDP）などの国際交流ルートや体制を利用し、「キャンパスアジア」学部プログラムと連動することで、中日韓三カ国大学院生養成における新たな教育運営モデルを設立する。その意義は学生の側からみれば、学科の制限を超え、三カ国の言語を学び、三種類の学位を得ることにある。自ら海外生活とインターンシップを体験することで、異なる文化間の相互理解を促進し、友好関係及び国際人材ネットワークを推進する。大学の側からみれば、本養成モデルの実施は大学院生養成におけるグローバル化協力を促進し、グローバル化した視野と素質の高い専門的人材を養成することができ、大学院生教育の国際競争力と影響力を向上できる。国の観点からみれば、中日韓の地域一体化は我々の戦略的目標である。この目標を達成するには、高度な言語能力を獲得し、東アジア文化の認知能力、理解能力と説明能力の高い優秀な人材が必要となる。そのためには国際視野をもつ、学術・教育能力の優れた教員と管理者がプログラムを率いる必要がある。大学にとって、国が必要とする人材を養成することは義務である。この戦略の実施は国の人材養成モデルの革新に新たな例を与えることができ、国の人材バンクの強力な支えとなるであろう。このプログラムは中国の大学人材養成のグローバル化プロセスを大きく促進するはずである。そして国の経済社会の発展のためにたゆまず創造的人材を提供できるのである。

## 付 記

本論文は広東外語外貿大学創立50周年を記念するものであり、2012年広東省大学院生革新育成計画支援プログラム「「キャンパスアジア」学士・修士共同養成モデル研究」（12JGXM-MS26）（中国語：中日韓「亞洲校園」本碩聯合培養模式創新研究）の研究成果の一部である。

## 参考文献

- 袁貴仁（2014）、「推進教育事業改革發展的強大思想武器——學習習近平總書記關於教育工作的重要論述」  
[http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe\\_176/201404/167479.html](http://www.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_176/201404/167479.html)。
- 劉清倫、李紅宇（2012）、「“亞洲校園”計劃：背景、實施過程與前景探析」『清華大學教育研究』p. 54。
- 樸鐘鶴（2013）、「“亞洲校園”計劃的發展現狀與未來」『現代大學教育』p. 58。
- 張憲生（2007）、「中日韓跨國遠程教育與研究生教學模式改革探索」『學位與研究生教育』p. 43。
- 李函穎（2013）、「從歐盟“伊拉斯謨項目”教學人員的流動研究」『黑龍江高教研究』p. 59。
- 譚敏（2009）、「從歐盟“伊拉斯謨世界計劃”看研究生跨國交流與合作」『學位與研究生教育』p. 64。
- 武誌娟等（2013）、「研究生與本科生的協同培養模式探析」『中醫藥管理雜誌』p. 470。

（原稿受理日 2015年9月21日）